
少年少女の冒険

ルーク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少年少女の冒険

【Zコード】

Z4494Z

【作者名】

ルーク

【あらすじ】

ある青年には、疑問があつた”この世界が、本物なのか”。

ある美女には、答えの出ない疑問があつた”生きている事に意味があるのか”。

ある少年には、理解できなかつた”神を信じて、意味があるのか”。ある少女には、分からなかつた”人を愛して、何になるのか”。

少年少女は疑問、理解できない事、分からない事の答えを見つけるため、旅に出る

プロローグ

俺には、よく、分からないんだ……

この世界が、本当に、本物なのか。

そんな事、考えた事もなかつた……

私には、よく、分からない……

生まれてきた事に、生きている事に、意味があるのか。
どんなに考えても、答えは出ないまま……

僕には、理解、出来ないんだ……

神を拝んで、信じて、そこにどんな意味があるのか。
神なんか信じても、意味なんかないので……

あたしには、分からないよ……

人に愛されて、人を愛してさ、その行為に何があるのか。
裏切られるかもしれないのに……

プロローグ（後書き）

「うまく書けてるか、わかりませんが、宜しくお願いします

俺の『プロローグ』

いつからだらう、『この世界は本物か』なんて、馬鹿げた疑問を持つようになったのは。

いつからだらう、誰かと話しているのに、起きているはずなのに、眠っているような、幻覚を見ているような感じになったのは。

あの日からだらう、あの日、あの瞬間に“アイツ”が目の前からいなくなつた瞬間……

「あつち～」

俺の名前は、クウカイ・シラ空海空。

十七歳、彼女無し。

突然だが、俺には十歳以前の記憶がない。なくとも、特に問題なかつたけど。

「文句言わないっ

ああ、それと、俺には十歳ぐらいの時から、ずっと一緒に居る、女

の子がいる。

月夜桜。

十七歳、彼氏なし、俺の好きな人。

だが実は、本当に十歳の時から一緒に居るのか曖昧なんだ
と言えないけど。

「いやいやいや、この暑さで、文句言わない奴なんかいないって

「良いじやん、これから海行つて泳ぐんだからさ」

季節は夏。今日、俺は桜に海に行かないかと誘われた。

当然、桜が好きな俺は、断れるはずもなく……、了解してしまった

「大体、文句言つくらいなら、断ればよかつたのに」

「近くに海があるだろうが、そこに行くかと思つてたんだよ。何だつてこんな遠いところまで……」

今俺たちは、俺達の町から隣の町の海まで“徒步”で来ている。
誰だつて、歩いて来てまで行くとは思わなかつたつづーの。

「良いの。文句言わずに歩く……」

「つたく、へいへい

「着いた……」「

「はあ～、やつとか

そつ言つて顔を上げると……そこには、今まで見た事がないくらい、
綺麗な海があつた

多分、俺は今口をあけて、マヌケな顔をしているだろう。

「…………何、だ……」「れ……」

やつと紡がれた言葉はこれだけだつた

それくらい、この海は美しかつた……そして、どこか懐かしかつた

俺の『プロローグ』（後書き）

初めてなので、ちょっとおかしくなってるかも知れませんが、宜しくお願いします

俺の『プロローグ2』

「ふふ～ん。どうよ?綺麗でしょ?」

「あ、ああ」

目の前では、桜が得意そうに小さな胸を張つている

「今、失礼なこと考えたでしょ」

「考えて、ない。つてこいつが、こんなとこ、どうやって見つけたんだ?」

「前に一人でここに来てさ、迷つちやつて。んで、適当に歩いてたらここにたどり着いたってワケ」

なんと、無茶な……

「一人で来てもつまらなくてさ。ここ、誰も来ないし。だから、空を呼んだんだ。夏休みに入つてから、暇してるでしょ」

「まあ、暇だけど……」

「…………それに、ここ、懐かしい場所なんだもん…………」

桜がボソッと言つた。だが、俺には聞き取れなかつた。

それに……気のせいだらうか、ボソッと何かを言つた時、アイツ、悲しそうな顔をしたような……。

「ん?今、何てつた?」

「えつ!??う、ううん。何でもないよー?」

「叫ばなくてもいいよ……」

ま、氣のせいかな。

「と、とにかく、泳ぐつよ」

「ああ、そうだな」

「あつ、お前、水着びいすんだ?」

今更だが、ここは、せつきも桜が言つた通り、誰も来ない。

誰も来ないから、更衣室なんか、当然あるわけもなく……

い、いかん。俺は何を考えているんだ。

「何? 今変なこと絶対考えたでしょ」

「か、考えてねえよ」

「考えた!!」

「考えてねえって」

「ホントに?」

「ああ、ホントだ」

「ふう〜ん。まあ、良いけバ」「
で、どうすんだ?」

「大丈夫よ。着てきたから」

「そつか。」

「ふう〜。きつちひ〜〜」

「生き返る〜」

歩いて来たから、汗でびっしょりな体を海の冷たい水で洗う

「はあ〜」

「なに、まつたりしてんのよ。あそこまで、競争しようよー。」

「疲れたんだよ、嫌だね」

「良いから!!早く!!」

「だあ〜〜、わかつたよー!!」

俺の『プロローグ2』（後書き）

まだ、プロローグなのに。

俺の『プロローグ』（前書き）

なんか、題名書くの面倒になってきた

俺の『プロローグ3』

俺と桜は遊びまくって、気が付いたら夕日が沈むところだった

「なあ、そろそろ帰るか？」

- 1 -

何だ？さつきから妙に、静かになつてゐるぞ？

「……ねえ、空。着替えるから、あつち向いてて」

26

な、何だあ……。着替えるだけか。

桜が着替えてる間に、俺も服を着替えた

「……終わったから、いひち向いても良いよ」

181

振り向いてみると、なぜか、とても悲しそうな顔をしている桜がいた

「ええ、空。尋ね前で寄つた一所あるんだナ」

「いいけど……。つていうか、お前どう

俺の言葉が終らないうちに桜は走りだした

「お、おにー！ 桜ー！ 待てつてー！」

俺はあわてて追いかけた

「ハアハアハア…………何、急に……ハア……走り出して……ハア……んだよ…………？」

俺は肩で息をしながら、聞いた

「…………」

「…………桜？」「

桜はさつきから黙つてる

俺は桜の態度を変に思いながら、周りを見回す

俺達が今いる場所は、崖の下ら辺で周りは木に覆われてる
空にはもう、月が出ていて、俺に背を向いて俯いてる桜を照らして
いた

「…………なあ、桜？」

「…………」

「…………桜。…………桜！」「

桜は、ビクッと体を震わせた

「なあ、桜。お前どうしたんだよ？今日のお前、なんか変だぞ？」

「…………空」

「な、何だ？」

急に桜が名前を呼んだのでびっくりした

「…空」

桜はそう言って、振り向いた…

俺の『プロローグ』（後書き）

うん、やつとこじまで来た。

やつぱり小説書くのって難しいですね……

感想、待っています。ちゃんと返信しますから

俺の『プロローグ4』

「ひらりを振り向いた桜は、涙を流していた……

「つなー!? 何で泣いてるんだよー!/?」

「……………」これは良いの。それより話を聞いて

は、話ー!? 泣いてんのにハイイツは何を話すつもりなんだ……?

桜は涙をぬぐってから、話し始めた

「…………空は、この世界が本物だと、思つ?」

俺はとりあえず答えた

「……本当にそう思う?」

「……何が言いたい?」

「……何で?」

「……記憶が、戻ったの」

「……は? 記憶?」

「私はね、この世界が本物じゃないと思つ
「記憶つて……俺と同じように桜も曖昧だつたつて、事か?」

「記憶つて何の事だ?」

「……空も記憶が曖昧なんじゃないの?」

「ああ。10歳以前の事だけだけどな

「……私もよ。でも、口口に来たらすべてを思い出した

「……ここ? あそこ海の事か?」

「いいえ。私達が今立つてる場所よ

「……は? 森しかないじゃないか。」

「あつごめん。空からは見えないんだ

そう言つて桜は横にどいた

そこには……岩があつた。

その岩はちょうど俺の胸よりちょっと下で、宝石がくつこっている
岩の周りはいろんな色の花がある

「これっていうか、この場所はさ、私がこの世界に来た時に倒れて

いた場所なんだ

「……桜？」

桜は俺に背を向けて、少しづつ俺から離れて岩に近づいていく

「口口に来た途端、頭が痛くなつて、倒れてね。その時に夢を見ていたのよ」

「……それが、記憶だつたつて？」

「そう。夢にしては現実すぎて、すべてに見覚えがあつて、とても、懐かしかつた」

「……それで？」

俺はだんだん、怖くなつていった。桜が俺の前から消えそうで。でも、体は動かなかつた

「それで、思つた。この岩に触れたら、元の世界に帰られるんじやないかつて」

「……桜は、帰りたいのか？」

桜は立ち止つた。そして、俺の方に振り向いて

「……さあ。分からぬんだよ。帰りたいのかかもしれないし、口口に居たいのかもしね。自分が自分でよくわからないんだ」

笑つた。その笑顔は自嘲にも見えだし、困つているようにも見えだし、そして、悲しそうだった

「でもね、口レは確か。岩に触れたら、本物の家族に会えるって」

「……桜。」

「私ね、妹と弟がいたみたい。双子なの、その子たち。私と3歳離

れててね、私の真似ばかりしてた

「桜。」

「私にベッタリで、可愛かつた。お父さんとお母さんはとても優しくて、幸せだった

桜はまた、俺に背を向けて、岩に近づいて行った

止めなきや。止めなきや。

心が焦り始める。だけど、それでも、体は動かない

「でも、ある日、既にキャンプに行つたの。森にね

「……桜！」

俺は叫んだ。それでも、桜は止まってくれない

「そこで、私、一人で探検に行つたの。それで迷子になつて

「桜！――」

「泣きながら、森をさまよつていた

どんなに叫んでも、桜は止まってくれない。それどころか、俺の声
なんて聞こえていないみたいだった

止めたいたのに。その手をつかんで、一緒に帰りたいのに。

俺は彼女の名前しか叫べない。

「そこでね、この岩を見つけた。岩がきれいで、周りの花が美しくて、見惚れていた。いつの間にか、涙も止まっていた

「桜！――！ 桜！――！」

「それで、思ったの。『触つてみたい』って

「桜！――！ 桜！――！」

声が枯れてきた。頬に温かいモノが流れた

「それで私は岩に触れて、この世界に来た」

「桜……」

桜と岩の距離は一メートルもなかつた

「この世界に来た時、記憶を失つていてね。この森に迷い込んだ、今のお父さんに助けられた」

「さく、り……」

「そして今にある」

桜は既に岩の隣に立つていた

桜は手をかざして、岩に触れようとして、止まつた
そして、また、俺の方に振り向いた

「……ねえ、空。私ね、空が、好きだよ。今まで、幼馴染でいてくれて、ありがと」

そう言った、桜の笑顔は、とても悲しそうで、でも嬉しそうに見えて、夢かつた

「桜。桜……桜!!」

俺も好きだ、やつ言いたいの。彼女の名前しか紡げない

「本当に、ありがとう。」

そう言って、彼女は俺の前から姿を消した……

俺の『プロローグ4』（後書き）

すいません、更新遅れてすいません

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4494n/>

少年少女の冒険

2010年10月10日09時12分発行